

秋山日出夫先生のプロフィール

旧国鉄合唱団の記念誌より

明治38年2月14日、秋山さんは東京の本所、北割下水のそばで鋳職人の次男として誕生された。ここは江戸時代を舞台とした捕物帖などによく登場する下町で、その頃全盛を極めた「浪花節」、「都々逸」の雰囲気の中で育った。

父親は蚊帳の吊り手を職人を使って作るのが仕事で、酒が強く、正月には酒樽を背にあいさつを受けるような人であったという。母親は声が良く、「火砲のひびき遠ざかり・・・」の「婦人従軍歌」をよく歌っていた。「母親の子守歌は、シュ・ベルト、ベート・ベンの交響曲にも勝る」というのが、後年、秋山さんの口癖であった。

小学校時代、先生が秋山さんの声を褒めて、学芸会などによく独唱させた。秋山さんの美声は祖父譲りだったようで、百姓をしていた祖父が野良で歌う声は村中に響いたと言われたほどの美声であったそうだ。トウスミトンボというあだ名の小学校の先生は、6年生のとき、秋山さんにカスリの着物を着せて、指揮棒を振らせたとのことである。

この頃、当時は第1次世界大戦の最中で、秋山さんはさっそうたる海軍軍人に憧れて、海軍兵学校へ行きたいと思っていた。しかし、父親から「職人の子は職人！」と一喝されて、幼い夢は破れた。

海軍士官への志を果たせなかった秋山さんは東京府立工芸学校へ進み、精密機械科で旋盤を専攻した。その頃は八・モニカの第一期全盛時代で、八・モニカに夢中になり、「ヒコ・キ・レコード」などに吹き込んで得意になっていた。

修学旅行の途中、京都の知恩院の講堂で、百人近い坊さんの読経が高い声あり低い声ありで渾然融和し、荘厳ともなんともいいようがなく響くのを聞いて、秋山さんは人間の声の偉大さ、素晴らしさに感激した。

大正12年、満18才の時に関東大震災で父を失い、瀕死の母と兄弟2人をおかかえて秋山さんの人生の苦闘が始まった。死者数万人といわれた死人の山から血だらけで這い出したとき、命がけの人の声、死線を越えて生き残った喜びの声、絶望に打ちのめされた声が祈りの声となって闇の中に盛り上がるのを聞いた。そして、被服廠の近くでは、炎と燃え盛る火がやがて消えようとするとき、ひとりの少女が立ち上がって賛美歌を歌いだした。髪は乱れ、全身に火傷を負った少女の顔を残り火がちらちらと照らしていた。少女は歌い終わってばったり倒れ、やがて動かなくなったが、その声は神の声のように、秋山さんには聞こえた。それ以来、合唱とは「掌」を合わせる心と固く信ずるようになった。

兵隊検査は三種合格であった。秋山さんは勤め人になった。機械工学専攻だったかられっきとしたエンジニア、会社で図面をひきながら歌を歌っていた。勤めて3年目に、同志社大学のグリー・クラブのメンバーだった山口隆俊という人が入ってきた。彼が秋山さんの美声に気付いて、やがて男声四重奏団の結成となった。これが東京リ・ダー・ター・フェルフェラインの先祖である。

この四重奏団はやがてリズムボーイとなり、コロムビア専属として、吹き込みに、演奏に多忙を極めた。図面をひいていたエンジニアは、派手なステ - ジ・コスチュ - ムに身を飾り、第一テノ - ルとして全国を歌って歩いた。ヒット曲も多く、「山寺の和尚さん」は今でも有名だ。吹き込み1回5円、月給80円。銀座のカフェ - でチップ50銭で女給さんが大喜びした時代である。秋山さんは楽しみながら稼いだ。

その大阪公演のときに、演奏を終えて宿に帰ると秋山さんの部屋にだけ大きな花束が置いてあった。宿の者に聞いてみると贈り主は女性としか分からず、しかも次の日も、また次の日も大阪公演が終わるまで花束は届いた。贈り主がだれであったかその後も分からずじまいとなってしまったが、秋山さんが黒髪豊かな眉目秀麗の男子であった時代のことである。

世の中に戦時色が強まって来ると、秋山さんはジャズを排撃し、士気高揚のため歌唱指導に全力で打ち込むようになった。鉄道省指導課に置かれた奉公会の囑託として工場の慰問や増産講話もやった。だから、戦争が終わってからおいそれとジャズに転向するわけにはいかなかった。秋山さんはステ - ジをあきらめ、合唱指導で残された生涯を生き抜く決心をした。

そして間もなく、「運輸省合唱団」の指揮者として登場された。また、朝日新聞社企画部内にできた日本合唱連盟の主事に委嘱され、次々に合唱団を組織し指導されるようになった。「富士山は美しい。その山頂は専門の音楽家がやるだろう。自分は裾野をやればいい。」これが秋山さんの信念であった。

そして、秋山先生は、著名な音楽家が魔術師と評した腕前を、合唱団の育成に発揮する。秋山先生が指揮すると目だって良い音を出すようになり、コンク - ルで優勝したり、よい成績を得たりするようになる。それは合唱に関する知識や技術もさることながら、秋山先生のパ - ソナリティによるところが多い。その辺りを秋山先生自身の言葉から引用してみよう。

「合唱は心のハ - モニ - から。これは私の合唱生活を通じて一貫した一枚看板である。心のハ - モニ - づくりに失敗した団体は必ずと言っていいほどに影を消してしまう。ハ - モニ - づくりに妙をえた団体は技術的に未熟であっても辛抱強く難点を克服して立派に大成している例が数多い。悪声がいって美声もいる。テンポ音痴がいるかと思うと調子の整わないのもいて、こんなアマチュア合唱団の世帯をやりくりする苦労は大変な物だ。技術的な差に加えて皆それぞれに異なった性格の集まりでもある。そこで心のハ - モニ - づくりが強調される所以があるわけだ。心のハ - モニ - が美しく豊かに実っていく過程の中から技術的な進歩は着々と伸びていくものだ。合唱のハ - モニ - が美しくなればなるほど、心のハ - モニ - もまた深さを増していく。音のハ - モニ - と心のハ - モニ - は、追いつ追われつ切り離すことのできない関係をつくっていくもので、それが合唱団の特色ある伝統を築き上げていくのだ。合唱団の人達が、合宿にハイキングにパ - ティに趣向をこらし、頭をしぼって企画するのも、結局は心のハ - モニ - づくりのため以外の何ものでもない。これは女性合唱、男声合唱、混声合唱であってもみな同じことだ。合唱生活の中から得られた人の和の美しさ温かさは何ものにも変えがたい尊い物だと思う。」

しかし、敗戦の焦土の中で、秋山先生がコーラスで生きる決心をした頃は飢えをどう凌ぐかが問題であった。コ - ラスを指導しても謝礼はしれていて、「そのころ、どうして食ったか分からない

い」状態であった。けれどもまもなく職場や学校に合唱団が次々に生まれ、盛り場にはうたごえ酒場が目につくようになった。合唱祭や、秋山先生も推進役となった朝日新聞社主催の合唱コンクールは年ごとに参加団体が増え、コラス熱は全国を覆った。秋山先生も編者のひとりである「合唱アルバム」も飛ぶようにうれた。

秋山先生は、日本で数少ない合唱指導のみならず合唱団の組織づくりを職業とした人である。だから、合唱団の活動が隆盛になった時代のスケジュールを見ると、合唱団から合唱団へ次々に飛び移る蝶のような忙しさであったことがわかる。

月曜日 国鉄、慈恵医大、毎日新聞

火曜日 農林省、日本火災海上、三菱銀行、日清製粉

水曜日 国鉄、全織同盟、文化学院

木曜日 味の素、大同毛織、HG

金曜日 農林省、東京都庁、松坂屋

土曜日 川崎重工、長銀、明大、若草

ほとんど昼休みか夕方、時間はきまっているから、「私はわるいことはできません」と言うくらい、秋山先生の動きは歯車のようなようだ。その間に合唱連盟の理事としての仕事やコンクールの仕事、原稿書き、放送、それに演奏旅行もあって、シーズンには日曜も祭日もなくなる。その多忙な時間を縫っての余技がパチンコであった。パチンコが世の中に現れてからずっと続けてきたというほどの入れこみようであった。

秋山先生はお酒は好きだった。国鉄合唱団の練習はもっぱら昼休みだったので、団員と一緒に飲むような機会は比較的少なかったが、特別練習の後や、パーティのときには、けっこう飲んでおられた。それでも、酔うというようなことはなく、冗談や楽しい話がでる程度に嗜まれていた。時にはちょっとあぶない体験談が出ることもあったが、団員とのザックバランなやりとりを楽しんでする程度の良い酒だった。

秋山先生に「まんじゅう論」という合唱についての見方がある。ソプラノはまんじゅうの皮で、見た目にはなりより大事。ベースはそれをのせる器で、器が汚くては話にならない。しかし、まんじゅうの味はアンコに命があり、よく味わえばそこに味がある。これがアルトとテノールだと言うのである。

秋山先生が自ら育てて指揮した合唱団の中から、全日本合唱コンクールにおいて国鉄合唱団が6年連続優勝し、HGメンネルコルも3年連続優勝、また農林省合唱団も優勝した。全国制覇あわせて10回は合唱会の金字塔である。

また、この間の文化的社会活動の功績に対して千葉県文化功労賞、文部大臣表彰、国鉄総裁表彰を受けられ、そして昭和46年には藍綬褒章が授与された。

昭和50年2月23日、京王プラザホテル・コンソートにおいて、秋友会主催による秋山先生のご逝去を祝賀パーティが催された。180人の出席者が“ You are my sunshine”を合唱する中に先生ご夫妻が入場された。この年はちょうどお二人の結婚40年目に当たっていた。数々の祝辞の

後、先生自身による詩が朗読され、全員による「静けき森」の合唱で閉会したが、すべての人々がいかにもわがことのように幸福そうな表情で秋山夫妻を囲み、会場全体が温かさに満ちあふれていた。秋山先生が「合唱は心のハ - モニ - から」と信じながらの30年間で、このような人も羨む雰囲気は自然に作ったのであろう。

秋山先生の合唱活動は会社の合唱団、大学の合唱団、地域の合唱団からママさんコーラスまで非常に広範囲に及んだ。戦争直後の荒廃期から始まり生活に一応のゆとりができた時代まで、数え切れないほど多くの人達に合唱の楽しさと喜びを与えてきた先生の功績は誠に大きいものであった。

昭和51年3月20日、秋山先生はふり返れば多くの波乱に満ちた人生を静かに閉じられた。享年71歳であった。みずからも歌い、また音楽の裾野を豊かにすることを追求して人に教え続けた、ほかに例を見ないただ一人の大きな人生であった。没後、国から勲四等瑞宝章が贈られた。